

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

平成 22 年 10 月 31 日

派遣者氏名（専門分野）	石川 禎仁（文化形態論・世界史講座・東洋史学）
-------------	-------------------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	「帰義軍期敦煌地域における水利管理制度の研究」
-------	-------------------------

派遣期間

平成 22 年 9 月 1 日 ～ 平成 22 年 9 月 10 日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	イギリス	ロンドン	大英図書館(the British Library)	

派遣先で実施した研究内容

報告者は、合計 6 日間にわたって大英図書館に滞在し、約 40 点の敦煌文献を調査した。調査にあたっては、まず、以下の点について記録した。形状、寸法、紙色、厚さ、漉き縞、紙質、押印・墨勾などの有無、行数、行間距離、1 行あたりの文字数、罫線などの有無、折跡、文字方向 これらはすでに項目を印刷した調査用紙を持参して記録した。また、そのほかに特徴的な箇所があれば、それも記入した。特に紙の厚さなどは、現状、現物でなければ解らないものであり、漉き縞も、多くの場合、実物を光にかざすなどしなければ見えてこない。これらの情報を得ることは、どのような人びとによってその文書が書かれたのか、またどのように「使用」されたのかを考察する際に、大きな手がかりとなるものである。

次いで、写真などでは判別が不能であったり、史料集や先行研究の録文では不審な文字を調査し、必要ならばルーペ・顕微鏡なども用いて筆の運びなどを確認した。同様に、墨でなされた墨勾や墨点などのチェック印について、筆の形状や墨の濃淡などを重点的に調査した。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

報告者の渡航目的は、大英図書館(British Library)に収蔵される、スタイン将来の敦煌文献(漢文文献)の実見による調査研究にあった。20 世紀初頭、現在の中国甘粛省の敦煌から大量に発見された敦煌文献は、当世社会の様相をそのままに伝える生文書を多く含んでおり、編纂された歴史書と対をなして、非常に注目される史料である。

報告者は研究に際して、これまで『敦煌吐魯番文献集成』(モノクロ図版)をはじめとする史料集や、世界各地にある敦煌文献のデジタル化の進展によって、インターネット上で公開される「IDP (the International Dunhuang Project)」のカラー図像を用いてきた(ただし、インターネット未掲載分も相当数残る)。しかし、生活に密着した俗文書から情報を引き出そうとすると、文字として記される情報も重要であるが、一方で、使用された紙の状態(寸法・厚さ・質・色・漉き縞など)や、墨勾・墨点などサインの跡、押印の有無、文字の配置、墨の濃さといった、僅かに残る「生々しい」跡もまた、当世社会を考察する際、貴重な情報であり、これらは実見でこそ引き出せるものである。

報告者は、これらの古文書学的な情報を収集するとともに、現物の敦煌文献を取り扱う技術を向上させることを調査の主たる目的とした。

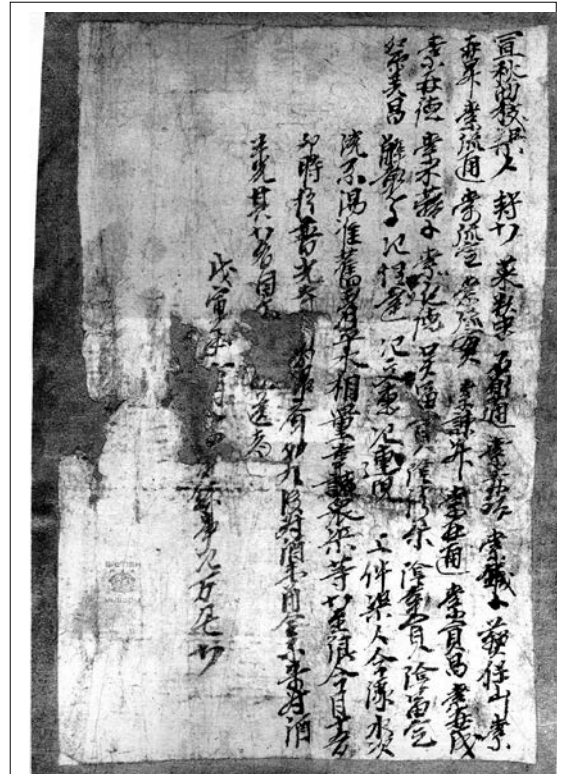
大英図書館に所蔵される敦煌文献をはじめとするスタイン・コレクションは「Special Materials」に分類され、閲覧の方式がそのほかの収蔵資料と大きく異なる。今回の調査において報告者は、大英図書館の一般的な利用の仕方を習得すると同時に、閲覧のための事前申請や、大英図書館における Special Materials の請求など、敦煌文献特有の閲覧申請・出納の方法を学んだ。これについては、報告者による「派遣先機関等利用マニュアル」に詳細に記したので、それも併せて参照されたい。

実際の文書調査においては、形状などのデータを収集し、文書の情報を 1 点ずつ記してファイルにまとめた。これらの情報は、今後、その文書が如何様に扱われたのかを考察する材料として生かされる予定である。

また、これまで不審だった文字や判別されない文字について確認し、先行研究の裏付けをとり、また幾つかの文字については新たな解釈を生ずるに至った。とくに S.6123「宜秋西支渠人転帖」は、渠(水路)の修理作業などをおこなった「渠人」に対する、何らかの活動への呼び出し状(渠人転帖)なのであるが、参集事由については文字の判読が難しく、細かく分析・論述した研究は少なかった。今回、報告者はそのうちの何文字かを精査することで、文字の判読に新たなアイデアを持った。今後、熟語や用例の有無などの調査と合わせ、考察する予定である。

今回の調査において報告者は、先述した渠人転帖をはじめ、社司転帖・行人転帖と呼ばれる、転帖(廻状)類の調査をとくに綿密におこなった。これらは転帖は、社司転帖ならば互助組織である「社」において、宴会や組合員の家庭におきた葬儀のための物品供出や日程などを組合員に通知するもの、行人転帖は城を輪番で警備したと考えられる「行人」の警備当番へ呼び出すものであり、宛先として複数人を載せ、それらの人びとに回覧されたものとされる。転帖については、特に社司転帖は練習書を含めて 200 近い件数が知られているものの、一律の書式で最低限の情報しか載せないため、今となっては書式の整理や、登場する人間の他種類の文書(契約書や官・寺院の会計簿、官の労働者名簿)との比較研究が為されるが、全体的に研究は尽くされた感がある。また、先行研究においては、転帖類について様々な研究が為されているが、情報量が少ないため、どうしても「回覧状」であるということからの「想定」にとどまることも多く、史料からの裏付けが為されないままに言及される事例も多々ある。今回、報告者は墨跡などを精密に調査することにより、ある種の転帖については、実際に文書としての転帖が回覧される人びとの範囲は、先行研究で想定される様な、宛先として名前が挙げられる人間全員であるとは限らない、という転帖運用の実態を示す結果を得た。この場合の転帖は、親族と推定される同姓を多く含んでいるため、親族内では別の手段で情報伝達されると考えられる。

なお、今回の調査において報告者は実物の敦煌文献を取り扱うことで、史料をとりあつかう「眼」を養えたと実感している。今後、実物ではなく史料の写真版をもとに考察する場合であっても、史料の「見どころ」を把握したことによって、以前より精緻に史料を視ることが出来るようになる。



S.6123 「宜秋西支渠人転帖」  
中国社会科学院历史研究所(ほか)(編)『英藏敦煌文献』10、  
四川人民出版社、1994、p.90。

## 派遣後の研究発表の予定

報告者に、口頭発表などの予定は現在のところなし。

今回の調査によって得られたデータ・知見は、現在執筆中の修士論文に生かされる予定である。